

令和４年度第３回柏市立図書館協議会　柏市子ども読書活動推進計画（第四次）案への意見

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
4	笹間　ひろみ	学習指導要領の改訂	学習指導要領の総則から引用している文であるが、この学習指導要領の理念である「主体的・対話的で深い学び」の部分の記述が（下線部）抜けている。 「小学校、中学校、高等学校においては、学校図書館を計画的に利用し、その活用を図り、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童生徒の自主的自発的な読書活動を充実することを規定しています。」 学校図書館は読書に親しむだけではなく、学びを支えるという点にもっと注目すべきではないか。 第四次計画全体において、学校図書館については、読書を楽しむという読書センター機能に力点が置かれている印象が強い。学校図書館イコールお話を楽しむ部屋という考え方を脱し、「授業改善」にいかに関わるかという点が、現在柏市の学校図書館が抱えている課題である。その課題に対して、図書館がどのようにかかわっていくかを深めていく必要があるのではないか。	p. 4修正 「児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに」 p. 41修正 「現在、学校での調べ学習に活用するため、学校図書館へ図書館資料の貸し出しを行っています。今後は、１人１台端末の時代に対応し、タブレットで成果物を作ること前提としたデジタル化した地域資料の提供など、図書館資料の効果的な活用方法について調査研究を進め、支援機能の強化に取り組み、子ども達の学びを支援します。」
7	笹間　ひろみ	第三次計画における読書活動推進の取組状況及び課題	第四次計画策定にあたって第三次計画を振り返り1～5各項目の取組状況と課題について記述しているが、課題については、第三次計画策定の際に第二次計画を振り返って記述されたものとほぼ同一の文章である。 ５年かけて取り組み、課題が変わらないというのはどういうことなのか。前回の課題について、原因の究明や現状を打破する取り組みをどのように行ったか、成果はどうだったかが明らかにしてほしい。 「学校図書館における読書活動」の課題(P. 23)も学校図書館を取り巻く状況が変化しているにもかかわらず第三次計画と全く同じ内容である。「調べ学習用(子ども用)パソコンの設置」とあるが、一人１台端末の時代に設置の必要はあるのか。またパスファインダーの様式の変更について、変更の必要性と変更内容について知りたい。	p. 23修正 「調べ学習用パソコンの設置」⇒「一人一台端末の活用」 「パスファインダーの様式変更」⇒「パスファインダーの更新」
10	宮島　衣瑛	子どものメンターとなる人の重要性	インターネットによる問題解決・学習等の支援として、コンピュータ環境の充実が図られている。これ自体は素晴らしい取り組みであるが、一方で子どもたちが自律的に活用する姿勢が前提となっているようにも思われる。 子どもが学習をしようと思って図書館に来て、何をどのように調べればいいのかわからなければ、もったいない。適切な資料へのアクセスをサポートする必要性は大人以上に高いと考えられる。司書の皆さまを積極的に頼れるように、学校図書館での指導充実や図書館内での案内などを進めていく必要があると考える。	今後の具体の事業での反映を検討します。
14	羽村　太雅	保護者の図書館利用促進の具体案が欲しい	保護者が読書の大切さを理解し楽しんでいる姿を見せる必要があるという意見に賛成します。 一方、何らかの具体策がないと実現は困難に思われます。 例えば最低でも、外部団体と協力したイベント出展の際にその場で利用者登録や貸出ができるシステムを作ったり、出展時に子ども向けの本だけでなく大人が借りたくる本をあわせて持参するなど、工夫が必要なのではないかと感じました。	今後の具体の事業での反映を検討します。 p. 29 , 34 , 43修正 「子どもの身近に本があることの大切さも伝えていきます。」
14	羽村　太雅	市の他の施設との連携の可能性	例えばパレット柏は中高生の勉強スペースのようになっています。ここに学習内容に関連した本があり、その場で借りられれば、「本を借りる」という習慣づけができるように思われます。 もちろん、クリアしなければならないハードルは多々ありますが、「子ども」を18歳までと定義しているのであれば、「子どもの集まる施設」は未就学児向けの施設だけでなく、中高生が集まる場も含めても良いように思われます。これが実現すれば、民間の施設での貸し出しの検討もできるようになるなど、可能性がさらに広がるポテンシャルを秘めているように感じます。	p. 14 修正 「また、中高生が集まる施設等での読書環境の整備も必要です。」

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
15	羽村 太雅	若年読み聞かせボランティアの育成	若いうちにボランティア活動を経験すると、例えば定年後に同様のボランティアとして活動するきっかけになるのではないのでしょうか。例えば中学校や高校、大学のサークルやゼミ、社会福祉協議会の夏ボラのススメ事業などと連携関係を構築し、学生の読み聞かせボランティアを育成してはいかがでしょう。特定の学生が長期にわたって取り組み続けるとは限らず、シニアボランティアに比べると育成のコストパフォーマンスは低いと予想されますが、長期的な視点では必要な投資ではないかと考えます。また、読み聞かせ体験を通じて、ボランティア活動をする学生自身も、読書の重要性を感じるきっかけになるのではないのでしょうか。	p.15 , 32 , 33 , 45修正 「若年層のボランティアの受け入れも積極的に行い」 「また、学校等と連携して、中高生の読み聞かせボランティアの受け入れを行ったり、職場体験の際に生徒に読み聞かせに参加してもらうことで、読み聞かせに関心を持つ若者を増やしていくことも、長期的な視点では重要です。」 「ボランティアの受け入れも積極的に行います。職場体験やボランティア活動を通して、読み聞かせなどの図書館業務を実際に経験してもらうことで」
16	羽村 太雅	オンラインで司書さんへの相談を可能に	せっかくの専門職である司書さんが、市民からは全く見えず、またアクセスできない存在になっているのではないかと感じています。Webページから司書さんへ相談を投げかけたり、開館時間中であればリアルタイムにチャットないしビデオ通話等で相談ができるような仕組みができると、レファレンスサービスの利用率も上がるように思われます。また、その際に寄せられた相談の中で、公開の許可がとれたものを公開していくと、他の市民も図書館をどのように利用できるのか、イメージがわきやすくなるのではないかと思います。例えば国立天文台では、質問電話というサービスがあり、毎日多数の質問の電話が市民から寄せられています。 https://www.nao.ac.jp/contact/astro.html	今後の具体の事業での反映を検討します。
20	三浦 章宏	学校図書館における読書活動	柏市が市内小中学校に対し、様々な支援を行っていることは評価する。 一方で、市内高等学校（特に市立高等学校）への支援が分析・課題提示を含め薄いように感じる。 p 1 5 学校図書館への支援が小中学校のみ記載されている。 p 4 2 具体的取組No.2 学校図書館への支援体制の充実（再掲）に市立高等学校が記載されていない。 P 3（小中高）に示すように、年齢が上がるにつれて不読率は高まり、高校生への更なる支援強化を行うことで、P 1 4 に示す利用登録率を向上させる対処の一つとなるものと考える。	p.14 修正 「また、中高生が集まる施設等での読書環境の整備も必要です。」 今後の具体の事業での反映を検討します。 P.42 市立柏高等学校につきましては、直接司書の先生が図書館に来館して本を選び、団体貸出カードで借りられる形で利用されており、学校配送支援システムの利用がないのが現状です。
23	羽村 太雅	読書習慣の取り戻し	例えば著者へのオンラインインタビューや著者による中学・高校での講演会の開催など、本そのものはもとよりその背景にいる「人」との関係を構築する企画はできないものかと感じました。子ども達から見て本に関連した「関係人口」を増やすことが重要であり、例えば出版社の編集者や、印刷・製本をつかさどる方々も顔が見えてくると本に対する印象が変わるのではないかと感じました。図書館向けに制作された書籍の関係者であれば、協力が得やすいのではないのでしょうか。一度、読書習慣を失っても、こうしたきっかけで該当する書籍を手にとり、そこから読書習慣を取り戻せる子供は一定数、存在するように思われます。	p.31 , 33 , 38 修正 「キャリア教育に役立つ内容の」
23	岩永 朗子	学校図書館と図書館の連携の強化	会議でもお話ししましたが、新たに何かをやるというよりも、これまで継続してきたもののマイナーチェンジを考えてはいかがかと思います。 柏市の教育において、図書館は目玉施策の一つであると思います、そこで、子ども司書講座の修了者の活用を考えていただけたらと思います。進学先の中学校、高校、そして大人になっても柏市の図書館に関わってもらふ具体策を考えてはいかがでしょうか。	今後の具体の事業での反映を検討します。

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
23	宮島 衣瑛	学校図書館の学習情報センター化	「調べ学習用（子ども用）パソコンの設置」とあるが、GIGAスクール構想によって1人1台端末環境が整った現在においてはどこまで必要かを再考する必要があるのではないかと考える。それよりも、1人1台端末ではできない高負荷に伴う作業（映像編集や高度なプログラミングなど）をすることができる、スペックの良い端末を学習情報センターには置いておくことが望ましいと考える。昨年末に文科省からGIGA スクール構想に基づく1人1台端末環境下でのコンピュータ教室の在り方について」という事務連絡が出されているが、コンピュータ教室と図書館を一体化したメディアルームを構築し、情報の収集（インプット）からアウトプットまでを一体でできる学習環境を整えることが望ましいのではないかと考える。 また、これは学校図書館だけにとどまらず、市立図書館自体もインプットからアウトプットまでができる施設として考えられるとより一層ユーザは増えていくのではないかと考える。	p. 23修正 「調べ学習用パソコンの設置」⇒「一人一台端末の活用」 今後の具体の事業での反映を検討します。 特に、スペックの良い端末の配置は、今後の検討事項と考えます。
25	笹間 ひろみ	第四次計画の基本的な考え方	1 基本目標 2 基本方針 とともにH29の第三次計画と同一である。第四次計画策定の核となる部分であるにもかかわらず、前回と全く同じとは残念である。書面会議資料には「改訂のポイント」として5点を挙げている。4章のところで「おはなし会」「電子書籍」「読書バリアフリー」について新設してあるが、基本方針に新たな方針をうまく組み込むことで、今回の策定の意図が見えてくるのではないかと考える。	p. 25 36修正 「アクセシブルな電子書籍を活用しながら」「すべての子ども達が」
25	丹間 康仁	3つの基本目標について	子ども読書活動推進計画は、市民の生涯にわたる読書の基礎を築くうえでも重要なものだと考えます。本計画（案）の基本目標1と基本目標2は主語を明記していませんが、計画策定の趣旨からして子どもが主語であると理解できます。また、基本目標3では主語が大人になっています。案では各基本目標で主語を子どもと大人に分けていますが、子どももいずれは成長して大人になること、大人もかつては子どもだったことを考えると、連続性のある枠組みで、基本目標3の表現をもう少し工夫できればと考えます。現行の「大人が子どもの読書を支援する」ですと、どうしても大人中心の取組のように読めてしまいますので、たとえば「子どもの読書を大人が支援する」のように順序を入れ替えることで、生涯にわたる読書活動をイメージしやすくなると考えます。	p. 25 28 修正 「大人が子どもの読書を支援する」⇒「子どもの読書を大人が支援する」
25	宮島 衣瑛	読書文化をどう守り、啓発するか	基本方針2のなかで「あたりまえに思われている読書の大切さを見直し」とあるが、読書文化をなぜ守っていく必要があるのかを再考する、というフェーズに来ているように思われる。即時的に必要な情報収集の手段としてはインターネット検索には勝てない。そこと争おうとするのではなく、より長い時間軸で考える必要があるのではないかと考える。 本を読むことは、人生を豊かにし、広く教養を身につけることにつながる。本を読むことの啓発活動は、すなわち生涯学習の推進につながる。どうやって本を読んでもらうか、というよりも、Well-being の観点から市民に訴えていくことが必要だと考える。	今後の具体の事業での反映を検討します。
26	早川 沙希子	居場所の観点について	前々回の協議会でも提示した居場所の観点が含まれていないことに問題を感じた。読書、およびそれを楽しむことのできる環境は子どもにとって大切な居場所となりうる。本を読ませることだけを目的とするのではなく、それを通じて子どもにどのような価値を提供できるのかについての言及が必要ではないかと考える。特に、子ども・若者の居場所については全国的に需要が高まっている。「社会全体で」「連携」して「支えて」いくならば、居場所の観点を含めべきだと感じた。	p. 25 36 修正 「安心して過ごすことができる施設」「子ども達の居場所ともなります。」
26	早川 沙希子	他機関との連携のあり方について	他機関との連携が、形式的なものにとどまっているように感じた。福祉・居場所・NPOなどの縦割りを超えた連携が必要ではないかと考える。	今後の具体の事業での反映を検討します。 p. 45修正 「図書館と地域の連携」の取組みを追加。「地域の活力となる子ども達が、地域への愛着や誇りを持てるよう、地域のボランティアやNPO団体、民間事業者等と連携し、地域の大人と子ども達が交流しながら学習できる機会の創出に努めます。」

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
29	吉原 美優	ブックスタート事業のオンライン・オンデマンド化について	読み聞かせにより得られる効果や期待される読書推進機能が果たせるのであればオンラインでの開催やオンデマンドでの配信にも利用ニーズがあるのではないかと推測します。幼児向けの動画コンテンツも広く利用されていることから、家庭や外出先での利用を促進できるのではないかと考えます。また、オンラインと紐づいたイベントや対面での読み聞かせ会の利用を呼びかけることで図書館への来館のきっかけを生み出すこともできるかと考えます。	今後の具体の事業での反映を検討します。
31	笹間 ひろみ	小・中学生期における読書活動の推進	具体的取組が第三次計画と全く同じである。第三次計画においてどういう成果が得られたのか、成果が得られなかったとしたら取り組みの何が課題なのか明らかにして、さらに一歩進んだ取り組みを期待したい。 ブックスタート事業を乳幼児期に行っているが、それを拡大してブックスタート2として小学校入学時にさらに3として中学校入学時に、教育長や図書館長のメッセージを添えて本を渡すのはどうだろう。入学説明会の機会を使って数冊から選ぶようにすることで、個に対応することもできる。 一人1台端末の活用と電子書籍の導入とで読書の幅が広がるであろうと期待される。学校図書館のバーコードと市立図書館のバーコードを共有し、貯本通帳に共通の読書記録を積み重ねてはどうだろうか。先進的に実施している自治体もある。 子ども読書をさらに充実したものにするような、思い切った変革をお願いしたい。 6のオリエンテーションは、複数回実施ではなく全学級で実施である。	今後の具体の事業での反映を検討します。 P. 32 修正 「複数回実施」⇒「全学級で実施」
32	吉原 美優	こども司書講座修了者の交流や合同講習などについて	市内小中学校からの応募があるこども司書講座をきっかけに図書館とのつながりを各校に持ち帰ってもらえるような仕組みがあるといいのではないかと感じました。 こども司書市立図書館を案内するツアーや各校のこども司書持ち回りの市内図書だよりの発行など、学内外を問わず、子供たち同士の交流を取り入れた活動が望ましいように感じます。	今後の具体の事業での反映を検討します。
34	高橋 史成	子どもの読書活動の普及啓発など	地域子育て支援拠点のイベントとして、おはなし会に類似する活動も行われているため、普及啓発または成長段階の取り組みの一つとしてもよいと思います。	今後の具体の事業での反映を検討します。
34	丹間 康仁	基本方針の2の説明文について	基本方針2の説明文の最後には「社会全体で子どもの読書活動を推進していく雰囲気作りを進めます。」と記されています。そそのうえで、子どもや親子と実際に関わる重要な事業がいくつも列記されています。これらは、決して雰囲気という次元には留まらない、柏市での読書活動の積み重ねであると受け止められます。教育行政や公共図書館の役割として、雰囲気作りに留まらず、読書活動を推進する気運を生み出して盛り上げていただき、読書のまちへのムーブメントを引き出していきたいと考えます。「雰囲気作り」の箇所は、ぜひともより積極的な表現にさせていただくことを期待します。	p. 25 34 修正 「雰囲気づくりを進めます」⇒「意義を共有できるよう、普及・啓発活動を行っていきます」
36	吉原 美優	幼少期の図書館利用登録について	乳幼児～3歳児など市内での健診時に図書館利用の案内を配布したり、待ち時間に図書館職員などによる読み聞かせなどを行うことにより、効率的に利用登録の促進が可能ではないかと考えました。保護者にとっても子育ての振り返りや相談をする機会であると推測しますので、市内施設の利用を案内すれば検討の機会になるのではないのでしょうか。	p. 7 29 34 43修正 「図書館の利用案内」 「図書館の利用案内も利用案内も一緒に手渡し、図書館の活用も促しながら」
38	高橋 史成	障がい児の読書環境整備	読書バリアフリーの推進と関連しますが、障がい児の読書環境整備について、可能な範囲で具体的な取り組みが記載されているとよいと思います。	p. 38 修正 「アクセシブルな電子書籍の充実や、点字資料、LLブックなどの障害者サービス用資料の収集に努め、読書環境を整備していきます。」

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
39	丹間 康仁	学校における読書環境の整備・充実に関する具体的取組について	柏市では、学校教育活動ではもちろん、子どもの読書活動の推進においても学校図書館が大きな役割を果たしており、引き続き重要な施策になると考えます。その中で、GIGAスクール構想に基づき配備された児童・生徒一人一台のタブレット端末を、「学習情報センターと読書センターとしての学校図書館」においても効果的に活用する方策を検討していただきたいと思います。時代の変化を踏まえて、図書館資料とタブレット端末が相乗効果を発揮する読書活動について研究していく取組に注力していただきたいと思います。さらに、学校図書館を運営していくうえでの人材の養成や研修についても充実していくことが、子どもの読書活動の深まりに寄与することから、本計画の他の方針の箇所等と関連させながらその位置づけを検討いただければと考えます。	p. 39修正 「1人1台端末の効果的な活用や、図書館資料とタブレット端末が相乗効果を発揮する読書活動についての調査研究を進めます」
40	佐々木 秀彦	学校図書館支援センターについて	○40頁に唐突に登場する印象があります。これは第4次計画で新たにに取り組むことでしょうか。そうであるなら、重要な役割を果たすと思いますので、どのような体制で、どんな取組が期待されるか、中身に踏み込んで記述してはいかがでしょうか。 ○すでにある仕組みであれば、第2章4で取組状況と課題を記載する必要があるのではないでしょう。	p. 41修正 「現在、学校での調べ学習に活用するため、学校図書館へ図書館資料の貸し出しを行っています。今後は、1人1台端末の時代に対応し、タブレットで成果物を作ることも前提としたデジタル資料の提供など、図書館資料の効果的な活用方法について調査研究を進め、支援機能の強化に取り組み、子ども達の学びを支援します。」
45	三浦 章宏	ボランティアの育成、支援、連携・協働	「地域社会全体で子育てをしていくことで」とあり、官民一体となった支援は重要なテーマと考える。 具体的取組として、主体が図書館であるなら、No.2の地域交流機能の充実を「こども図書館」に限定せず、柏市独自の分館体制を活かして、図書館分館も（例えば「こども図書館及び図書館分館において」など）記載してはどうか。	p. 45修正 「こども図書館及び図書館分館において」
45	高橋 史成	ボランティアの育成、支援、連携・協働	読書に関わるボランティアの養成に関わる周知や活動支援など、当会ボランティアセンターでもお役に立てる点がございましたら連携させていただきたいと思います。	図書館としても、今後、連携・協力体制を強化していきたいと考えます。
45	丹間 康仁	ボランティアの育成、支援、連携・協働について	子どもの読書活動を推進するうえで、図書館が他の機関や組織と連携・協働していくことは重要な方策であると考えます。そこで基本方針4では、3つの項目に分けて連携体制を示しています。1は「図書館と学校図書館の連携」、2は「図書館と子育て関係機関の連携、支援」とし、連携先の機関が明確であるのに対して、3は「ボランティアの育成、支援、連携・協働」となっており、地域との連携という言葉は明示されていません。計画策定の趣旨では「家庭、地域、学校、図書館等が連携しながら」（p.6）とありますので、本計画が図書館の連携先としての地域をどのように位置づけるのかについて明らかにしていただき、さらにボランティアのネットワークをどのように地域へ広げていくのかについても構想していくことが、身近な地域を生活基盤としている子どもたちに向けては一層重要になると考えます。	p. 45修正 「地域の活力となる子ども達が、地域への愛着や誇りを持てるよう、地域のボランティアやNPO団体、民間事業者等と連携し、地域の大人と子ども達が交流しながら学習できる機会の創出に努めます。」

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
47	笹間　ひろみ	計画の推進と評価	評価が十分に行われていないことを感じる。 評価の機関として「柏市立図書館・学校図書館連絡検討会」が記されている。(P. 42にも図書館と学校図書館の連携として記述されている。) 学校図書館に関わる仕事をしているが、その存在を認識していない。「柏市立図書館・学校図書館連絡検討会」の役割と機能について知りたい。 また「柏市立図書館協議会」において、「柏市子ども読書推進計画」について評価する機会を持つことはなかった。定期的に評価しそれを公表することで、この計画が実行性のあるものになるのではないかな。	「柏市立図書館・学校図書館連絡検討会」は、図書館配送が開始された平成20年度から、「図書館・学校図書館連絡検討会」としてスタートし、以降、毎年2回開催されています。柏市立図書館と学校図書館の間で、それぞれの情報を交換し、相互理解の下、お互いの課題解決に向けて連携を図っていくことを目的としています。コロナの影響もあり、開催中止が続いていますが、次年度の再開を検討しています。 計画の進捗状況の評価、結果の公開を適切に進めていきます。
1 31	早川　沙希子	表記について	「また、少子高齢化が進み～現状に対し」がいわゆる核家族で男性が働き女性が家庭を守るあり方を通常としているように取れるのではないかな。 表No. 1の「家読」「家族の絆作り」が、現状においては誤読されかねない表現は控えた方が良いのではないかな。	p. 1 31修正 「家族のあり方が多様化している中で」 「家族の絆づくり」⇒「家族のコミュニケーションを深める」
20 23 40	佐々木　秀彦	学校司書（学校図書館指導員）の位置付け	○学校図書館における読書活動推進の鍵となるのは、学校図書館の専門職の配置と考えます。これに関し、学校司書の位置付けについて質問と意見を申します。 ○平成26年の学校図書館法の改正により、学校司書の配置が努力義務となりました。これに対する柏市の方針を明確にした上で、取組状況、課題を提示してはいかがでしょう。 ○学校司書の全校配置を将来望ましいとするのであれば、それを目標としたうえで、当面は司書教諭のスキルアップと学校図書館指導員の配置の拡大を目指す、という流れではないでしょうか。 ○今後の具体的な取組として、学校図書館指導員のネットワークの強化、研修の充実が必要ではないでしょうか。司書教諭の研修と同様、中学校区ごとの学び合いや、先進自治体の視察など、スキルアップのための取組の充実が期待されます。	p. 22修正 「学校図書館指導員が全ての小中学校に1人、小学校は週4日以上、中学校は週3日以上配置され、授業支援を行っています。」 今後の具体の事業での反映を検討します。
29 33	早川　沙希子	子どものあり方の多様さへの言及について	子どもの発達障害や多国籍児童など、子どものあり方が多様であることへの言及が必要ではないかな。	p. 15　すべての子どもたちへの読書環境整備推進の必要性を述べることで対応。 「発達障害などで文字を読むことが困難な人」 「日本語を母語としない人」

ページ	委員氏名	件名	意見	対応
他	藤田とし子	時代の変化、市民のライフスタイルの変化に合わせたに併せた	推進計画全体に関する感想です。どの項目も充実した内容であると思いますが、基本的はこれまでと同様に「図書館に足を運んでもらう」ことが前提の計画のように見えます。一方、昨今の子どもたちは学校以外にも習い事などでとてもタイトな生活を送っているなか、どのようなタイミングで図書館に足を運ぶことができるのか、イメージできませんでした。 また「タイパ」という言葉が象徴するように、なんでも手軽に時間をかけず用事が足せるタブレットやスマホが身近にある環境の中で、本を手に取り読書することの意義や価値、楽しさを伝えていくためにはこれまでとは異なる手法が求められるのではないのでしょうか。 例えば、かしわインフォメーションセンターでは育児中の親世代に「こども図書館」の情報提供を積極的に行っていますが、まだまだ認知度が低く、施設の魅力を言葉でお伝えしても今ひとつ反応が薄いというのが現状。おそらくパンフレットやSNSでイベント情報を発信しても「こども図書館に行く」という行動を促すことは容易なことではありません。 そこで重要になるのは、時代の変化や市民のライフスタイルの変化に即した情報提供、PRの手法です。「計画」から「実現」につなげるための具体的なアクションプランが求められると思います。 そのためにも、若い世代の市民有志に積極的にかかわっていただきながら活動を推進していく「しくみ」と「しかけ」も用意すべきでしょう。 おそらくこれまでのようにイベントを用意して来館を「待っている集客」から、まちなかや市民活動の場へ出向いていき、市民が思わず参加したくなる「攻めの創客」に転換していくことが定説なのだと思います。	・今後の具体の事業での反映を検討します。
他	羽村太雅	「柏らしさ」を計画に	全体を通じて、柏らしさや「柏だからこその特徴」があまり感じられませんでした。例えば「あり方」の策定の際には、柏の特徴は「市民活動の活発さ」であるとされていましたが、市民活動団体との連携や、活発な市民活動を紹介するという意気込みや具体策は（昔話など一部の例を除いて）読み取れませんでした（私の読解力の問題かもしれませんが）。 また、柏には、東京の都心からアクセスの良い緑豊かなエリアが広がっていること、最新の研究と高度な教育が活発に行われている文教都市であること、世界有数の街づくりが行われているエリアがあること、人口減少の社会にあってトップクラスの人口増加が起きていることなど日本国内でも稀有な特徴が多数あります。そうした柏の唯一性を活かした計画になると、「柏版」の計画を策定する意味がより高まるのではないかと感じました。	今後の具体の事業での反映を検討します。
他	岩永朗子	周知と評価	委員を2年間務めることを通して、委員の皆さんのお話を聞けて、大変勉強になりました。図書館の在り方についてのご意見になるほどだと思います。学校経営にも参考にさせていただきたいと思うこともあります。 策定した計画の体系の周知の方法の工夫と進捗状況などを客観的な数値などではかることをさらをお願いしたいと思います。 子ども司書講座で【こんな図書館にしたい】がありますが、委員の皆さんと子供たちで語り合える場もあってもよいかなと思います。	計画の進捗状況の評価，結果の公開を適切に進めていきます。 今後の具体の事業での反映を検討します。